

鳥取県における近代和風庭園の構成と意匠

はじめに

本稿は平成17・18年度の鳥取県近代和風建築総合調査で実施した庭園調査物件のうち、とくに住宅に限定してその様式的・空間的特徴を整理したものである。なお、検討対象は後世の改変・改造が少なく、庭園の築造当初の痕跡を色濃くとどめた民家・町屋など38庭園とした。

近代和風住宅の庭園配置形式

3つの庭園配置形式 38庭園について主屋と付属屋（門・離れ・茶室・土蔵など）との位置関係をつぶさに検討すると、その中間領域に空間化された庭園の配置計画にはいくつかのパターンが存在していることがわかる。それぞれのパターンには建物と庭園の用途・機能、空間・風景に共通した特徴が顕現されており、庭園配置形式としての妥当性が指摘できる。その形式とは、主屋と主庭との位置関係から、大きく①カギ形配置、②逆さカギ形配置、③中庭形配置、の3点に集約される（図34）。

カギ形配置の庭 江戸末期から昭和初期に至るまで、連綿と継承されてきた本県の伝統的かつ典型的な庭園配置を示すタイプである。その特徴は、主屋の棟通り（中軸線）を邸宅敷地の基軸として割りつけ、表門から主屋玄関に至るまでに距離的な「引き」を設ける。その「引き」により生成された空間に前庭と主庭を併置し、主屋裏側には後庭を配置する。このような庭園配置から、敷地計画は主屋の中軸線より表側に付属屋として茶室、客間を設けた離れなど接客機能を有する建物が配置され、主屋中軸線より裏側には土蔵など日常生活に密着した付属屋が設けられる、という明快な空間区分がなされる点に特徴がある。以上から、主屋一階は接客機能を有する広間が主屋表側の建物隅部に配置されるため、主庭も広間の縁に沿ってカギ形（L字形）に設けられるのである。

逆さカギ形配置の庭 接客空間を有する広間が主屋裏側の建物隅部に設けられたために主庭も主屋裏側の広間の縁に沿って、上記のタイプとは逆さのカギ形を呈するものである。以上から、このタイプは敷地の奥に茶室、離れなど接客機能を有する建物が位置し、より格式の高い空間・風景を「奥にしつらえる」という明快な構成デザインがはかられた点が指摘できる。

中庭形配置の庭 道路に面して主屋が配置されるものに共通するものである。このタイプは道路から主屋玄関に至るまでに距離的な「引き」が確保されていないため、前庭は省略され主庭のみの配置となり、その主庭は四方が主屋や土蔵などの建物、塀などで囲繞されるため、中庭的な空間を呈する。わが国では各地域に近世から続く町屋庭の標準形と指摘できる。

庭園の構成・意匠と空間的特質

庭園の基本構成にみる和の伝統 38庭園の基本構成は、①築山およびその山腹傾斜地に組まれた三尊石風の枯滝組、②池もしくは枯池、③座敷縁側平庭部の飛石園路、の3点であり、構成それ自体は近世からつづく伝統的な池泉庭（15庭園）、枯山水庭（23庭園）を志向するものである。しかしこの基本構成にみる伝統性とは裏腹に、細部の意匠・技法・しつらえについては、以下のように近代を決定づける多様な展開がはかられていた。

定視空間から逍遙空間へ - 踏分石の多用 38庭園の空間機能から導かれた意匠上の特徴は、踏分石を多用することにより庭内動線の拡大をはかり、近世住宅の定型とでもいべき定視庭から、庭内を周遊させる逍遙庭へその性格を大きく転変させていることにある。この特徴は明治中期から昭和初期に至るまで、近代を通底する様式的特徴となっている。踏分石の多用による庭園空間の逍遙性の確保は、カギ形配置の庭、逆さカギ形配置の庭に数多く確認され、茶室、客間など接客空間の充実とともに、庭園においても来客者の空間体験を誘発させることを意図して登場した構成技法であると指摘できる。

新たな空間感覚 - 巨大化する3つの役石 本県の近代和風庭園について、近世と近代を明確に区分する細部意匠の相違は、庭内において奇妙な威容を放つほど巨大化した役石、すなわち、①沓脱石、②踏分石、③滝組中尊石、の3石である。役石の形状寸法は、邸宅敷地の規模と庭園面積の相違により左右されるものであるが、庭園の近景（沓脱石・W=1.5~2.3m内外）、中景（踏分石・W=1.5~1.8m内外）、遠景（中尊石・H=1.5~2.0m内外）に空間の骨格を決定づける役石を巨大化させるという現象は各邸宅に共通する特徴となっており、近代独特の空間感覚が生成されていたことは間違いない。本県における庭園の役石が巨大化する傾向は明治期以降に端を発するものであり、大正期にそのピークを迎える。しかし昭和を迎える頃に

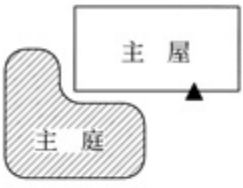
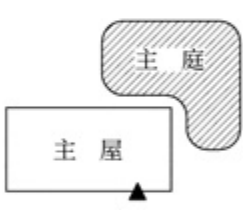

庭園配置形式	庭園数 (38)
<p>カギ形配置の庭</p> 	<p>本県の伝統的かつ典型的な庭園配置。主屋表側に十分な庭園空間を確保するために距離的な「引き」を設け、主庭を座敷の縁に沿ってカギ型に配置する。</p> <p>25庭園</p> <p>河上家 (郡家町) 松下家 (境港市) 奥田家 (鳥取市) など</p>
<p>逆さカギ形配置の庭</p> 	<p>主屋の裏側に接客空間が確保され、庭園も奥座敷の縁に沿って配置されるタイプ。より、格式のある空間・風景を奥にしつらえるのが特徴となる。</p> <p>10庭園</p> <p>木島家 (若桜町) 伊藤家 (智頭町) 岡空家 (境港市) など</p>
<p>中庭形配置の庭</p> 	<p>主屋玄関に距離的な「引き」を設けず、前庭を省略し主庭のみを配置する。四方が建物や塀などで囲繞されるため、庭園は中庭的な空間を呈する。</p> <p>3庭園</p> <p>原田家 (鹿野町) 能勢家 (鹿野町) 鉄永商店 (青谷町)</p>

図34 鳥取県における近代和風庭園の配置形式

なると、本県においても「新数寄屋風」の影響がみられ、巨大化した庭石が再び小さくなっていくのである。

前庭・主庭の連続性 - 内垣の設置による空間の視覚操作

本県の近代和風庭園でもっとも典型的な庭園配置を示すのはカギ形配置の庭であるが、このタイプは前庭と主庭とを併置する点に特徴をもつ。ここで問題となるのは、前庭と主庭との「接点」の空間処理だが、本県の場合は、その空間接合部分に内垣を設置することであった。25例が確認されたカギ形配置の庭で内垣を設置するものはそのうち実に19例にのぼる。その空間的特徴は、総じて前庭アプローチを視点場として内垣庭門から主庭部にかけて飛石を打ち、その飛石園路の見通しを庭門開口部のフレームを用いて風景としての連続性を顕在化させ、きわめて技巧的に空間を区切りながらつなげるという視覚操作をおこなっているのである。

京都へのあこがれ - 「流れ」の空間化 本県の近代和風庭園には、明治中期以降京都において展開された自然主義庭園の影響を受けているものが多数確認された。近代自然主義庭園とは、ダイナミックな借景、緩曲線の園路を配した芝庭などに特徴をもつが、主要構成は緩やかに蛇行する「流れ」にある。38庭園のうち、流れを採用したものは13例が確認された。とくに斉尾家(北条町)、太田垣家(鳥取市)、矢田貝家(岸本町)の3例は主庭全体を流れがたどる空間デザインがなされ、自然主義庭園の「写し」とでもいうべき技巧を看取することができる。

「和」の洗練 - 増幅する数寄屋趣味 さて、昭和初期における近代和風庭園の特色は、大正期には飛石に大石を積極的に採用するものから、一転して小ぶりの丸みを帯びた川原石を採用し、また景石についても、立石よりも伏石を多用し、植栽も雑木を基調とした「新数寄屋風」の新機軸を生み出したが、本県における庭園もその余波を受けているものが確認された。その典型として指摘できるのは、小川酒造、丸山家など、倉吉市に造営された昭和初期築造の庭園である。庭園作者は両庭とも神戸出身の造園家・巽武之助であり、大正期から昭和戦前期にかけて倉吉近辺の庭園を数例手がけていた。上記の庭園は「茶の空間」を邸宅敷地全体にこころみた近代数寄者の庭のように、雑木林の間を小ぶりの飛石が点々と伝っていく疎林の美、淡い光を受けた上品な流れなど、「日射しの可視化」を意識的にこころみていたのである。

おわりに

以上、本県の近代和風庭園は、原則的には近世から連綿と続く伝統的な基本構成を呈する。しかしその細部デザインは、踏分石の多用による逍遙性の確保、沓脱・踏分・中尊の3役石の巨大化による新たな空間感覚の生成、内垣を用いた空間の視覚操作による前庭と主庭の連続性など、近代を決定づける意匠的特徴がいくつか見出された。ただし本稿で指摘したことはその特徴の一端であり、庭園立地、地場材料(庭石、植栽)などについては、今後も詳細な調査の余地が残されている。(栗野 隆)